



Eva Crane Trust

ECTD_304

TITLE:

My journey in sixty countries: Japan (In Japanese)

SOURCE:

Honeybee Science: 25(1): 25 - 34

DATE:

2004

Reproduced with permission of Tamagawa University.

<http://www.tamagawa.ac.jp/sisetu/gakujutu/honey/>

ミツバチ科学

HONEYBEE SCIENCE

VOL. 25

NO. 1

2004

ミツバチを追いかけて —クレーン博士の日本滞在記—

Eva Crane

1984年3月ネパールの旅を終えた私は、バンコク経由で日本に向かった。2週間滞在し日本の主要4島のうちの2つ、本州と九州の各地を訪れた。他の2島は本州の北にある北海道と南の四国である。

日本とヨーロッパは共に古い文明をもつが、交流がはじまったのは15世紀中頃になってからである。私が日本滞在中に慣れない生活習慣に次々に遭遇したのも不思議ではあるまい。

町田と玉川大学

バンコク発のフライトは最大の島、本州にある成田空港に到着した。ここは東京から60km東にある。空港ビルは乗客以外立入禁止だったが、それは空港建設に反対する学生の妨害工作で、爆弾も仕掛けられることがあるためだと後でわかった。空港内では順路を進むと、女性の優しい声で、何を次に行うべきか英語でアナウンスされてくる。指示に従って進み、どうにか東京シティーエアー・ターミナル(TCAT)行きバス乗り場に行き着いた。TCATでも別の音声に、バスから荷物受け取り場所まで案内され、出迎えに来てくれた松香光夫さんと吉田忠晴さんにそこで会えた。東京、町田市の玉川大学ミツバチ科学研究所(注1)の方たちである(2000年に松香さんは大学の全研究施設を傘下に置く学術研究所の副所長に任命された)。町田に向かう吉田さんの車は私がネパールで慣れたジープと比べ静かで滑らかに走り、豪華だった。コンクリートジャングルを通りぬけ郊外に出ると、山頂が雪で覆われた富士山が見えた。道路にも雪が残り、暖やかな冬用コートを着ていて嬉しかった。気温30℃、湿度100%のバ

ンコクではコートがたいへん不合理に見えたものであったが。

松香さんの家で、妻の洋子さんと娘の明子さんに会った。1971年モスクワの第23回国際養蜂会議で彼女たちに会ったとき、明子さんはまだ産まれてほんの数か月だった。

玄関で私は靴を脱がねばならず、替わりにスリッパを出された。ここだけでなく、あちこちで提供されたスリッパはどれも私の足にはあまりにも小さく、はいて歩くのが非常に困難だった。寝室(注2)に入るときはスリッパも脱ぐ。畳はイグサなどの草を織って造られたマットで、一枚がちょうど一人が寝るのに必要な大きさだという。部屋の広さは「6畳の部屋、8畳間」のように畳の数で表される。私に提供された寝室にある家具は低いテーブルのみで、あとは2枚の薄いマットレスが畳の上にしかれ、それにシーツと暖かい羽毛布団が掛けてあるだけだった。私が訪れた大多数の日本の家庭で、背の高い家具をほとんど見なかった。これは家の内部を硬い壁でなく、紙の仕切(注3)で隔てる日本家屋の構造と同様に、地震による居住者の怪我を最少限にする知恵なのだそうだ。

近所にある岡田一次教授宅へ歩いて行った。教授はミツバチ科学研究所所長であり、さらに洋子さんの父親でもある。酒井哲夫さんなど数名のミツバチ関係者を交え、日本の緑茶と大豆粉でできたおいしいお菓子(それは果物入りチーズのような味がした)をいただき、それから丸いテーブルを囲んで素晴らしい夕食になっ

注1 現在の名称はミツバチ科学研究所

注2 畳敷きの和室を指す

注3 障子、ふすま

た。食卓を飾る皿には、ヤリイカ、生のまぐろ、他の2種の魚、サラダ、たけのこ、そして柔らかい牛肉とニンジンなどが、美しくアレンジされていた。例えば、ヤリイカは薄くスライスされて皿の中心に白い「バラの花」を形成している。とり箸を使って料理を自分の皿へとりわけるのが、初心者には難関だった。食事の最後はスープで、中身の麺や野菜の風味がもっともよく味わえるように、音を立てて吸い込むのだそうだ。クリームをかけたイチゴと、緑茶もいただいた。

洋子さんは松香フォニックス研究所を設立し、その事務所が家の隣にある。フォニックスとは一般的な音声学と異なり、通常使われる英語のスペリングに直接関連づけた音読法で、例えば ee や ou のようなスペルはこういう発音になる、kn とつづられたときの k や単語の終わりの e など、発音されない文字があることを学ぶ。彼女がアメリカで習得した方法を用いて10人の非常勤職員が児童に英語を教えていた。

翌日、玉川大学を訪問した。日本には100の国立大学と、700の私立大学があり、玉川は私学である。幼稚園からの大学院まで、約1万人の学生がいるが、春休み中で人影はまばらだった。丘陵地に広がるキャンパスには多くの花木や低木が植えられて、非常に美しかった(図1)。結球せずに赤、緑、白色の葉が開いている観賞用の「ハボタン」など、初めて目にする植物もあった。数本の木がまだ冬の装いで、面白く上品な藁の筵で覆われていた。

岡田教授は偉大な伝統主義者で、大学の他の場所と異なり、ミツバチ科学研究所の靴の扱い

は日本式である。ドア横の大きな下駄箱にスリッパがならび、入り口で靴を脱ぐ。吉田さんが私のために特大のスリッパを探してくれたので、歩くのがずっと楽になった。それでも階段の上り下りは難しく、最上段まで登らないうちに、たいてい片方のスリッパが抜け落ちて、一番下までばたばたと音を立てて落ちてしまうのだった。研究室をあちこち訪れた後、教授室で大学院生が一人ずつ自分の研究内容を説明するのを聞いた。意志疎通は容易ではなかったが、私たちはなんとかやりくりした。

校内の記念館で学長の息子(注4)にお目にかかった(図2)。学長は他に約束があった。ここで私は、日本式挨拶の一般形式である“おじぎ”についての礼法を学びはじめた。3つの方法があるかのように見えた：頭のみを下げる(恐らく知人に対して)；上半身を約45度に曲げる；更に深く水平にまで頭を下げてお辞儀すること(友達に対して、または相手との位の違いを表すため)。お辞儀は何回も繰り返されることがある。挨拶を交わす2人の中で位が低い方の人物は、より深くお辞儀をする。幸運にも、私は名誉ある客として扱われたので頭以上に下げる必要があまりなかった。お辞儀は主に成人の日本人における条件反射だと聞かされたが、まだしゃべることも出来ない幼児でさえも、会釈のために頭が絶えず上下していた。

学長室の大きな低いテーブルをかこむ肘掛け椅子に10名程が座り、私を歓迎する昼食会となった。木製のお弁当箱の蓋を開けると、様々なごちそうが美味しそうに小皿によそわれ、桜のつぼみの若枝で飾られていた。次々に料理を



図1 玉川大学キャンパスにて(右は松香光夫氏)



図2 小原芳明氏と(注4 現玉川大学学長)



図3 学生に講義。右端は通訳する佐々木氏

運ぶウエートレスはひざまずき、あたかもそれが神聖なもののように、両手を使ってテーブルに置いた。デザートにイチゴとオレンジがでた。オレンジの皮はらせん状にむかれていて、皮を上から持ち上げると全体がひものようにほどけ、中の果肉は食べやすく細工されていた。

昆虫学研究室に戻り、学生に最初の講義をした(図3)。私はゆっくり話し、佐々木正己さんが一文ごとに通訳してくれた。後で受けた学生たちの質問から考えると、講演内容の多くが理解されたようであった。

町田滞在中にみぞれと雪がふる非常に湿った日があった。日本では誰もが傘を使用し、母親の自転車の後ろに乗る子供でさえ、自分の傘をさしていた。すべての建物の入り口には傘立てがあった。傘の持ち手を金属板の穴の中に入れ、そこに鍵を掛けられる。これで傘の所有者はあとで取り出すときまで安心である。

松香家で過ごす最終日に寝室で1時間をかけて自分の荷物を4つの組に分別整理した。第1組は明日東京での講演に持っていくもの、お



図4 講演「世界の養蜂とハチミツ生産」に耳を傾ける養蜂関係者(京王プラザホテル会議室にて)

よび続けてもっと寒い北方面へ向かうための暖かい衣類。第2組はその旅行用のバック。第3組は暖かい南へ行くもう少し長い旅行のためのスーツケースで、これは数日後にまた東京で松香さんに会うときに持ってきてもらう。第4組は私の帰京まで家に置いておくものである。

東京と栃木で

満員の通勤列車によって東京の中心部、新宿へ行った。車内では何人かの乗客が(風邪を引いて)鼻と顔の上にガーゼ・マスクを着けていたが、さらに多くのマスク姿をその後も目にした。養蜂家との会合が開催される京王プラザホテルへ向かって歩いていると、レストランのウィンドウに飾られている、ろうやプラスチックで作られた、たいへん精巧な料理の見本に目が引き寄せられた。

会合には日本各地から約50人の男性と2人の女性が参加し、その多くが大規模養蜂家と加工販売業者であった(図4,5)。600 km 遠くからみえた方もいた。80枚のスライドを見せた。すべての機材が効率的に働き、松香さんが通訳する私の話に聴衆も多くの興味を示したので、この日の講演はとても楽しかった。

昼食後、広範囲の主題について質疑が1時間あり、松香さんは両方向に通訳してくれた。ついで名刺の交換に関して学習したことを実行するチャンスが来た。これは英国の握手に相当する儀式のようだ。各人は右手で自分の名刺を差し出し、同時に左手で相手の名刺を受け取る。私めがけてしきりに差し出されてくると、それ



図5 これから向かう栃木県の養蜂家と挨拶。右後は案内役の下島大作氏

それに私の新しい名刺をお渡しするのが至難の業であった。一人の方が、彼の会社のハチミツ処理プラントを写した大きな写真をくれた。私が1980年に書いた本(Honey: a comprehensive survey)を全面的に参考にして、横浜にこの工場を構築したということだった。

第1組の荷物に入れた暖かい衣類で身支度を整えて、大田原市で養蜂とハチミツ販売事業を営んでいる下鳥大作さんと共に電車で出発した。何百台もの自転車が駅周辺に駐輪されている東京の「ベッドタウン」を次々に通り、3回電車を乗り換えて、宇都宮(おそらく東京の北方100 km)へ着いた。宿は洋式ホテル(靴は履いたままで良い)であったが、夕食は下鳥さんのおすすめに従い日本食にした。低いテーブルをはさみ下鳥さんは座布団の上でしっかりと脚を組み、私は背もたれ付きの外国人用椅子に座った。豪華な料理が、岡田家での食事と同じパターンで進み、スープと皮をむいたリンゴに楊枝が刺さったものでしめくくられた。下鳥さんはこのホテルでは受付係がわずかに英語がわかる程度なのを心配して、帰る前に私の朝食の注文を日本語で書いてくれた。

翌朝、彼の運転で日本でも有名なイチゴ栽培地域へ行った。彼はポリネーション用にミツバチを300群貸している。田舎の道路は狭く曲がっている。わらぶき屋根もみられる道沿いの家屋は木造か、コンクリートで覆われた木造(注5)であった。土地は集約的に利用されており、イチゴの温室や稲田が多かった。訪問したイチゴ育種家はひとつひとつの花に手で授粉する方法を説明してくれたが、最近まだ命名されてい



図6 原著に掲載されている著者撮影の盆栽園写真

ない新しい品種を開発したという。そのイチゴは一粒が100 g位あり、世界で最良の風味を持つとのことだった。果物を年間20～25 t生産する彼の施設では家族を含む6名が働き、収穫ピーク時はさらに3人を加えている。イチゴの開花期は11月～4月で、40～50日後にあたる2月～6月に実を結ぶ。8月には翌年用の若い苗を、日光山地へ運び上げる。これは早く寒さにあてて開花を促すためである。

北西の山中にある日光へ向かい、途中で日本版の園芸センターに立ち寄った。なじみのある園芸植物のほかに、ここでは盆栽も購入できる(図6)。盆栽は仕立てるのに長いものでは20年もかかり、£1,000もする高価な品もあった。サボテンもあり、本物の花が別の開花していないサボテンにつけられていた。日光には多くの寺社がある。私たちは300年前に日本の統治者が植えた赤のカエデ(*Cryptomeria japonica*)の道を通った(注6)。日光国定公園ではどこも、まばらな植生の険しい丘陵が折り重なり、似通った風景を形成していた。つまり傾斜地に雪はあるが、稜線に生える木々が、白い背景に対して濃い縞模様をなしている。これが日本画でよく見られる山の風景なのかと納得した。

50のヘアピンカーブの単線道路(注7)を登ると、凍結した中禅寺湖に出る。湖の出口の滝(注8)の下は、雪の中の青い空洞と多くのつららが出来ていた。私たちは「拝観ルート」に従っていくつかの壮大な神社を歩いて訪れた。神道は日本の宗教で、先祖と自然の精神を敬う。いくつかの神社ではスリッパを借りることができたが、最も神聖な場所では、それも許されなかった。磨き上げた青銅製の階段の下で靴を脱ぐ。ストッキング履きの足元には非常な冷たさだった。日光東照宮で3匹の猿の彫刻のオリジナルを見た。それらは「見ざる、聞かざる、言わざる」であった。

松香さんが迎えに来てくれる浅草まで電車で帰った。彼はみやげ店がならぶ狭い道と、桜の造花を効果的に付けた裸の木の並木を通して、浅草寺へ連れて行った。本殿には多くの人々がお参りに来ている。祈願を神に気づいてもらう

ように手を叩き、棧越しに地下の大きな穴めがけてお金を投げた(注9)。本殿横には様々な願い事が木に書かれたお札や絵馬が用意され、これに願いを書いて神へ頼むために、購入できる。また信者が捧げた沢山の灯明と、人々が立ち止まって吸う芳香の大釜(注10)があった。

浅草は、これまで見た東京よりも庶民的な町であった。普段の食べものを知りたいので、昼食は安い喫茶店で頼んだ。お茶を飲み、そばと、推測上残り物と思われる、魚と野菜を油で揚げるために使用された衣が入っている魚スープ(注11)を食べた。

九州・福岡へ

荷物第3組を手には、アイルランドのサイドカーのような袴座式モノレールに乗って羽田空港に向かった。そこから日本の主要な島の中で最南に位置する九州にある、大規模な工業都市福岡へ飛ぶ。福岡県の農業試験場で養蜂部門を担当する辻川義寿さん(図7)は、ウィーン近郊カーレンベルク山麓のように素晴らしい市街の眺望を楽しめる、丘の上に建つホテルへ連れて行ってくれた。今晩は福岡県知事が別室で晚餐に招待してくれているとのことで、大急ぎに着替えをしたが、実際には代理として畜産課のお役人が来たのだった。生まれて初めて“さけ”、つまり発酵した米から作る日本の伝統的な飲み物(アルコール23%)を飲んだ。それは口の狭い酒瓶に入れて、温めて出され、卵入れのようなかわいらしい器に注いで飲む。さけの味をとくに好きとも嫌いとも思わなかった。

日本の若者が年輩の人たちより背がはるかに高いのはなぜか、と尋ねると、古い世代は子供のころ貧しい食生活をしていたこと、また伝統的な姿勢で長時間座ったり跪いたりしていて血が足へ流れるのが妨げられ、身長が伸びなかった、ということだった。近頃の若者はすでにこの姿勢を取らないという。

福岡県農業総合試験場を表敬訪問した。場長がくれた1978年に試験場創立百年を記念して

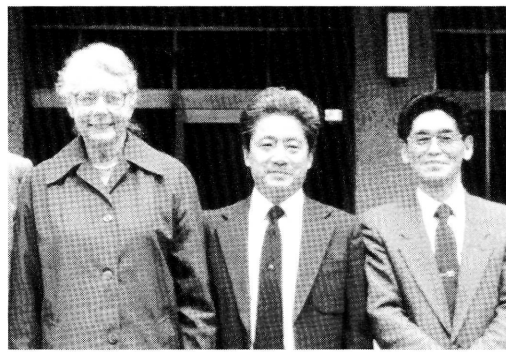


図7 九州大学の平嶋義宏氏(中央)、福岡県農業試験場(当時)の辻川義寿氏と

作られたテーブルクロスに、年号が日本式に表記されていた：つまり現在の天皇の在位年数、この場合は53(注12)である。場内にあるニホンミツバチの伝統的巣箱を見学して、日本の養蜂は、伝統的な巣箱が横型である中国と、直立した丸太巣箱のある韓国の双方から導入されたのだろうと感じた。

チェコ・スロバキアのときのように後部座席の窓にレースのカーテンが張られた黒い公用車に乗り、田圃が続く谷を抜け太宰府天満宮を訪れた。明るい橙色に塗られた美しい本殿は1590年に造営された古い建物とのこと。観賞用の樹木、低木、大きな石、菖蒲池などがある美しい庭だった。私たち以外の訪問者は、お参りに来た数人の日本人のみであった。

九州でもう一か所訪れた藤井高治さんの養蜂会社(図8,9)は、アカマツに覆われた丘に囲まれ、小さな木造の家が散在する曲がりくねった谷の中にあった。社屋の前の美しい庭園は小さな葉のアザレア(ツツジ)が地面覆いとして用いられ、およそ30cmの高さに刈り込まれていた。カメラ(ツバキ/サザンカ)が生垣に用いられていたが、つよく刈り込まれているために花がなかった。どうやら日本では、大部分の植物は束縛し、きびしく躰けなければならないと考えられているらしい。藤井さんの一族は1,000群の巣箱を管理し、毎年南の九州か

注5 木造モルタル

注6 杉並木と取り違えている

注7 いろは坂

注8 華厳の滝

注9 賽銭箱

注10 大香炉

注11 たぬきそば

注12 昭和53年

ら北の北海道まで花を追って1,700 kmを移動する。そのことで、つぎつぎに開花期を迎える花（レンゲ、ミカン、リンゴ、クリ、シロツメクサ、ライム、ニセアカシア）から花蜜を連続的に収穫できるという利点がある。

この日泊まった原鶴温泉は今なおウを使った漁が行われる数少ない場所のひとつで、夏へ向けての鳥の訓練がちょうど始まったところであった。鳥は首輪をはめられており、捕えた魚を飲み込むことができず、漁師が魚を得られるようになっている。私はまた日本式ふとんで眠り、今やこのスタイルが気に入った。そば殻の枕さえも快適に思え、布団から滑り落ちることはなかった。2 Lのお湯が入った魔法瓶と、急須・茶葉入りの茶筒・かわいらしい茶碗が5つ入ったすばらしい漆塗りの箱が私の部屋に配られた。それで夜と朝にお茶を飲むことができた。

藤井さんは私が伝統的トウヨウミツバチ巣箱を見たがっていたので、福岡の年配の養蜂家の家に連れて行ってくれた。狭い庭のあらゆる隙間に、合計20個の背の高い巣箱が詰め込まれている。保温用に藁のむしろが巣箱の周りに巻かれ、円錐形のプラスチックのふたが雨を防いでいた。平たい中蓋は巣箱の横壁に乗せてあり、蜜巣を収穫するために養蜂家はすべての巣を中蓋のすぐ下から切り取り、それからいくつかの巣の上のほうを切り離した。半分程度の巣箱は空で、ハチが「逃げてしまった」状態であった。

北へ戻るために新幹線で九州を離れるとき、足元にタンチョウヅルを従えた賢い翁の座像を納めたガラス製の人形ケースを辻川さんがくれた。ツル（英名Craneは著者の名字と同じ）

は長寿と知恵のシンボルだという。私はこれを是非英国へもって帰ろうと心に決め、まずケースを分解して側面のガラスのサイズを全て測り、ガラスは置いていった。帰りの飛行機では、翁と彼の鳥（の像）を手荷物で機内に持ち込み、枠はスーツケースにしまい、帰国後改めてガラス板を買って人形ケースを復元した。今もそれを毎日眺めて楽しんでいる。

新幹線は関門トンネルを通り九州から本州へ渡った。すぐに私たちは広島で途中下車して、1945年、戦争中に落とされた初の原爆によって死亡した8万人の人々のために建設された平和記念館を1時間ほど訪れた。さらに大きな被害を与えるような爆弾がそれ以降も作られたのは間違い沙汰だと私には思えた。

京都

京都までの列車は混雑していたが、藤井養蜂場からいただいたハニーブルーンを食べて元気を出した。京都駅のプラットホームでは京都大学の井上民二さんが私たちを迎えてくれた。松香さんも井上さんに面識がなかったが、あたりにいる欧州人は私だけだったので、すぐに見つけてもらえた。日本滞在中、遠くに他の欧米人を見かけることは時々あったけれど、言葉を交わす機会は一度もなかった。松香さんは私を預けると、20分後の新幹線で東京に帰った。私を家に泊めてくれた井上さんはスマトラのミツバチとハリナシバチを盛んに研究する気鋭の研究者で、奥さんと二人のお子さんがいる。彼は仏教徒で奥さんはプロテスタントのクリスチャンである。その日は澤田昌人さんご夫妻も見え



図8 藤井養蜂場で。左から二人目が藤井高治氏



図9 藤井養蜂場が保存する養蜂資料を見学

てアジアやアフリカ各地のミツバチと養蜂について多くを学んだ。仲間にザイール（コンゴ）のピグミー族やケニアの Dorobo 族のところで活動した研究者がいるとのこと。インドネシアの西半分の島々を研究した人は、引き続き東に向けて研究を続けているそうだった。

婦人方が食事の準備をする台所に私も加わって日本料理の調理を体験した。調理そのものは比較的短時間で済むが、食材の下準備はかなり手が込んでいます。豆腐を作るには、大豆を水につけて柔らかくもどし、塩化マグネシウム溶液（注 13）を加え、ミキサーで粉碎する。水を加え鍋で加熱、カゼイン（タンパク質）が分離したら水を切る。こうして出来た豆腐はベーコン巻きのミートローフと共に供され、レモンチーズケーキとインドネシア産の紅茶も頂いた。

私たちが囲んだ低いテーブルの天板は可動式で、綿入りのキルト（注 14）がその下に掛けてあった。キルトの下に足を延ばすと、中のやぐらに付いている 500 W の電熱器が足を暖めてくれる。カシ米尔地方の携帯火鉢を思い出させるような仕組みの暖房器であった。

京都は紀元 784（注 15）年から 1868 年まで日本の都で、多数の名所史跡がある古い歴史の町である。3 千以上の寺社があるそうで、翌日の日曜日に連れだつて見物に出かけた。私が訪れた 2 つの仏教寺院はまことに美しかった。一つの寺で井上さんはひざまずいて祈り、それから大きな青銅製の鐘を鳴らした。鐘は固定しており、長い綱で水平につり下げられた丸太の棒で鐘の横を叩くのだった。

詩仙堂も訪れた。1636 年にある詩人（注 16）が個人的な隠遁所として建て、畳、半透明な滑る壁（注 17）、詩神を奉った部屋などが当時のままで保たれている。庭を見渡せる廊下に出ると、眺めがあまりに美しく、思わず腰を下ろした。仏教徒、キリスト教徒、神道信者みな一様であった。靴はもちろん建物に入るときに脱いでいたが、庭に出てその美しさを満喫できるように別のサンダルが準備されていた。

お昼にうどんを食べてから、金閣寺に行った。1398 年に造営されたが 1900 年代に焼け落ち

ている。再建されたときは、20 kg の金箔が建物の外側に張られた。樹木は緑や青銅色ばかりで、ここでも他の庭と同様、花には庭園設計の重要な役割が与えられていないように見えた。けれども別の寺社に向かう途中の道で、開花し始めているウメの木も見かけた。あずまやに腰掛け、お茶を飲みながら通りを眺めていると、沢山の若い両親が生後一か月の赤ん坊をお宮参りに連れて行くために次々と参道を歩いていくのがみえた。

最後に広隆寺の霊宝殿にある紀元 600 年頃に作られた大変貴重な美しい木製の仏像（注 18）を見た。仏は太った座姿ではなく、穏やかな美顔で身体を傾けたほっそりとした男子の像であった。今でもあの姿は記憶に残っている。

除雪された道路を上って京都の北東にある比叡山山頂（海拔 1000 m）まで行った。頂上にはゆっくりと回転する観覧塔があり、古都京都のすばらしい眺めと、雪をいただいた峰越しに他の方角の景色も見渡せた。日本滞在中ここで一度だけ野猿の群を見たが、彼らは大変人間になれていて餌をねだっていた。

井上夫人に茶道について質問したところ、3 月 20 日（春分を祝う祭日）に私の部屋で体験させていただけることになった。私は普段の服装だったが、本来は上等な着物を着ているべきだったのだ。部屋の真ん中で座布団に正座した夫人の前にはお盆が置かれ、美しい絵の描かれた茶碗がふたつのついている。それは井上夫妻の娘と息子の誕生祝いとして、祖父母から夫人に贈られたものだそうだ。井上さんと私は壁際の座布団にすわった。夫人は手順どおりに予め沸騰する湯をそそいで温めから、乾かした茶碗に大変上質な粉状の緑茶を入れる。次に約 100 mL の湯を注いで、小さな竹のブラシで泡だらけになるまでかき混ぜる。私たちは特別なお菓子をいただき、その後で茶碗を渡された。これ

注 13 にがり

注 14 こたつ布団

注 15 784 年に長岡京遷都、平安遷都は 794 年

注 16 元徳川幕府旗本の石川丈山

注 17 障子

注 18 飛鳥時代の弥勒菩薩半跏思惟像



図 10 シャッターチャンスは逃さずに

を時計回りに一回転させて、美しさを鑑賞するようにと教えられた。お茶を飲んだ後は反時計回りにお椀の正面がこちらに向くように回し、主要な装飾がよく見られるようにお椀を傾ける。井上さんはもう一つのお椀で同様に一連の仕草をし、それから夫人と席を交替し、夫人のためにお茶をたてた。これが一般的なやり方かどうかは分からない。

女子学生と一緒に平安神宮（日曜に訪れた比叡山とは別の所、注 19）に行った。彼女は自分が将来どのような結婚をするのか知りたくて、神社でお参りを済ませるとおみくじを引いた。金属製の管を振って、隅にある小さな穴から鉄の棒を一本取り出す。数字が書いてあるので、それを神官に見せると同じ番号のおみくじをくれる。これに彼女の将来が占ってある。結婚は焦らず待機せよ、という言葉に元気づけられたようだった。彼女の両親は娘を嫁がせるのに熱心でなく、代わりに家族の友人であり、尊敬される指導者でもある岡田教授が彼女のお見合いの世話をしているという。1人の男性に紹介され1か月お付き合いをしたがどちらからもNoとは言えなかったという。そんな場合、岡田先生は他の相手を捜してくれるだろうが、彼女が3回、4回と見合い相手にNoを言い続けるのは賢い振る舞いではないとのことだった。

岐阜

京都から名古屋で乗り換え、岐阜へ向かった。列車は下の方には樹木が生え、頂は雪で覆われた丘に囲まれる広い谷を走る。春先はこの谷一

注 19 英文では "Heian" と "Hiei" が紛らわしい

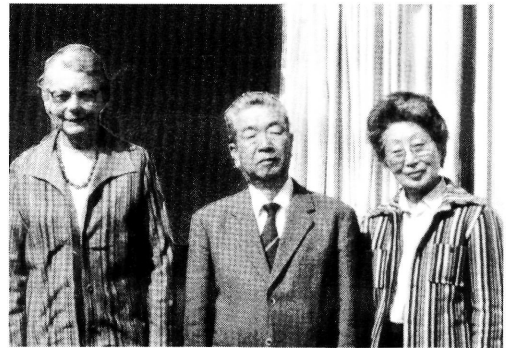


図 11 岡田一次教授、ゆり夫人と

面によい蜜源植物であるレンゲが咲いていたが、今は稲田となっている。このあたりの古い家の多くは、上の階（屋根裏部屋）の天井が低く、そこの部屋で寝ている使用人達はまっすぐ立てなかったという。どうやら使用人の身分ではそれがふさわしいと考えられたようだ。

東京から来た岡田教授と合流し、養蜂関係の博物館と日新蜂蜜株式会社を訪れた。正式な面会のために日章旗とユニオンジャックが飾られた会議室のU字型テーブルの上座に座った。教授が東京からわざわざ持ってきてくれた私の著書「Honey: a comprehensive survey」を社長に贈呈した（先生の配慮は驚くばかりであり、ここ以外でもすでに何回か同様のゆきとどいた心遣いを受けた）。社長からはこの地方の鶺鴒い船の人形をいただいた。これは鶺鴒匠や、首に長い縄をつけ近くを泳ぐ数羽の鶺鴒まで完全に再現したものであった。

初期の日本の養蜂に広範な知識を持つ学者として名前を知っていた渡辺孝氏も訪ねた。彼は父親から日本の養蜂に関する多数の蔵書を受け継いでいた。10世紀にさかのぼる記録も少しあり、当時は本州の各地域から朝廷にハチミツが年に1~2升（2~4L）税として献納されたとのこと。また日本人は米を発酵させて日本酒を造ったが、ハチミツからはアルコール飲料を造らなかったようである。

東京へ戻る列車は、ウナギの生簀、湖で「海苔」を養殖している場所、ミカン園、そして背の低い生垣のように刈り込まれた茶畑を通り過ぎた。岡田先生は、私が会った中で最も時間を意識する日本人である。列車が富士山に近づいて

くと、私に写真を撮れるようにカメラを準備しておくようにと告げ、懐中時計を手に持ち、「シャッターを押すのは今だ」と教えてくれた。時計も列車も時間を正確に守ったので、富士山は時刻ちょうどに、産業ビルの大群の向こうではあるが、その美しい姿を現した。

つくばと町田再び

東京駅で佐々木さんが私を預かり、東京の北東にあり、1981年に設立されたつくば研究都市に向かった。国立畜産試験場には養蜂部門があったが、私が訪れた養蜂会社などのつながりはほとんどないようであった。養蚕試験場も訪れたが、ナイロンなどの化学繊維が絹に取って代わったために、職員はすでに半減していた。

つくばではテーブルと椅子、ナイフとフォークのある西洋風のサンルートホテルに泊まった。寝室の天井にお知らせがあり、「マッサージ12000円(約£35)」とあった(注20)。

とうとう松香家に戻り、自分の荷物や旅行中にもらった多くのプレゼントと再会した。再び岡田家に夕食に行ったが、今や私たちは「家族」であり、客間でなく台所で、紳士方もジャケットやネクタイなしで食事した。岡田夫人は食べ物をテーブルへ運んだり、酒德利(ガスコンロにかかったやかんの中に立ち、私が食事前にプレゼントされた「白鶴」が満たされていた)を人肌の温度に保つのに忙しく働いていた。

まず岐阜の川でウが捕え、岡田先生が家へ運んでくださった魚から食べ始めた。これは明らかに特別なごちそうだった。次はすき焼きで、テーブル中央においた小さなガス台上の重い金属の平鍋で調理する。鍋に牛の脂身を塗り、薄切りにした非常に柔らかい牛肉、酒・きのこ・あらかじめ切っておいたねぎと白菜・春菊の葉をそこに投入する。食事する人自身が、とても長い箸で鍋の中身全体を動かす。同時に各自が小さな器に卵を割り入れ、かき混ぜておく。すき

焼きができあがったら、一口分を食事に用いる箸で取り、溶き卵につけ、十分に冷めたら食べる。中央の鍋がほとんど空になったら更に具を加え、それを何度も繰り返す。最後の回(4回目)が最も美味しいといわれたが、かなりの量の酒がそれまでに鍋に加えられているからだろうと私は思った。岡田夫人はテーブルに着いたが、一緒に食事はしなかった。食後に彼女は片づけをして、居間で私たちに緑茶とイチゴを出してくれ、そこでほかに記憶に残るすき焼きの夕食の思い出を語り合った。

翌日の大部分は研究所での仕事に費やされたが、夕方岡田先生がスーパーとデパートに連れて行ってくれた。新島恵子さんが大きな辞書を持って同行してくれたので、日本で食べていた様々な魚、植物、果実および穀物の名前を知ることができた。植物の食材にはフェネル(注21)、フキ、キクの花やゴボウ、また多くの海藻や大豆製品もあった。魚は桁外れな多様さで、丸ごとや切り身が小ぎれいなパックにつめられていた。一塊のパンを見つけ、それが日本で見かけた最初のものであったために私はすっかり混乱した。恵子さんは私が毎日和風の食事ばかりとっていたことを奇妙に思った。代金は英貨でも支払えるが、どんな品物も単価が£1を下回ることがなく、英国の物価より2~4倍高く思えた。しかし日本人が価格について不平を言うのを聞いたことがなく、「安い」というのはここでは軽蔑の言葉のようであった。

恵子さんは和服売り場に連れて行ってくれた。地下の食料品売り場からエスカレーターを11回乗り継ぎ9階にあがる。私は日本においてほど多くの階を上ったことは今までなかったが、毎日利用することで訓練になった。アパートでは階の間におよそ15段の階段があり、公共建築物ではおよそ30段である。おそらく高いビルは地震の被害を防ぐために防御工事を施されたのだろう。和服は見るのも手で触るのも喜ばしいすばらしいもので、もっとも柔らかい絹から硬い金襴までさまざまな手触りのものが、どれも魅力的にデザインされていた。柔らかな素材の襦袢の上に着る着物には、幅広

注20 1984年当時のレートで換算されている

注21 フェネル(茴香:ウイキョウ)は日本ではあまり見られない。セロリのことか。

注22 帯

な腰布（注22）やその他の飾り紐がついている。着物のサイズはインドのサリー同様に一定であるが、布地の模様が着る人の年齢や立場によって変化する。結婚後は着物と帯をより地味な色に変え、飾りを減らす。ややアカデミックガウンの袖に似ている、着物の袖の長く垂れ下がった部分（注23）も短くなる。松香洋子さんは子供の頃に見た着物の洗い方を描写してくれた。彼女の母親（岡田夫人、今はズボンとブラウスを着ている）は着物の縫い目をすべて解き、バラバラの布にもどし、それぞれの部分を洗う。板の上で平干しして、再び縫い合わせる、もちろん全て手作業である。家族の着物はかわるがわる洗われ、毎日彼女は洗って乾かしたばかりの着物を再び縫い合わせていた。

惜しいことに私が日本を離れるときがきた。羽田空港へ行く途中人気のあるすし屋に寄り、すしを準備している主人の向かい側に座った。彼は炊きあげられた短粒種の（粘り気のある）米を大きな器から取り、球状になるように転がし、生魚の切り身やその他のおいしい食材を加え、全体を加工した海苔で巻いて、それを薄く切る。私たちのすしを作ると主人は（きれいに拭いた）カウンターの上におき、私たちはそれを指でつまんで食べた。

羽田で私は成田空港行きリムジンバスを簡単に見つけられた。バスの乗務員が誰も英語を話せず英国航空に乗るにはどこで降りればいいのか分からなかったが、何とか正しいところで降りられた。ここからアラスカのアンカレッジへと向かった。機中で隣席の日本の少年たちが私にポテトチップスを勧めてきた。彼らはおじと一緒にアラスカヘスキー休暇に行く途上だった。

日本での日々は非常に忙しいものであった。国を見て、養蜂とミツバチ研究について学ぶことに加えて、私は新たな生活習慣に適應しなければならなかった歩き方、座り方、食事の仕方、他人への挨拶、そして寝方まで。私は決して覚えるのが速い人間ではないけれど、それでも私に対していらいらする人はなく、たいへんに寛大で、私の便宜と快適な生活のために気を

注23 たもと

使ってくれた。また私がこれほど尊敬を持って待遇された国も日本の他にないのである。

（著者の住所は下記参照）（翻訳 東華代・榎本ひとみ）

EVA CRANE. Making a bee-line. My journeys in sixty countries, 1949-2000. Chapter 16. Japan. *Honey-bee Science* (2004) 25(1): 25-34. International Bee Research Association, 18 North Road, Cardiff, CF10 3DT United Kingdom.

The following original article was translated by courtesy of the author and the publisher:

Crane, E. 2003. Making a Bee-line. My Journeys in Sixty Countries, 1949-2000, Chapter 16, Japan, 1984. pp. 205-215. International Bee Research Association, Cardiff. 327 pp. ISBN 0 86098 245 9.

編集部注：

国際ミツバチ研究協会 (IBRA) の初代会長エヴァ・クレーン博士は在職中 (1949-83)、引退後を通じ、また今日にでも実に旺盛な研究執筆活動を続けている。世界の養蜂とハチミツ、その歴史に関する多くの著作（下記参照）には、世界各地 60 か国を旅行して自ら収集した貴重な情報が多く納められ、いずれも養蜂研究には欠かせない良書となっている。

ミツバチを追いかけて、時には世界の最も隔絶された地域へも足を運び、彼女が見聞きした、その土地の普通の人々の暮らしを生き活きと記録してきた。

本稿はその足跡をまとめた近著 Making a Bee-line. My Journeys in Sixty Countries, 1949-2000 (2003年 IBRA より刊行) の第 16 章 Japan, 1984 (訪日編) を、著者および発行者の許可を得て翻訳・掲載したものである。

なお、翻訳は原文にできるだけ忠実に進め、本文中の記載の明らかな過誤や補足が必要な事項については個々に脚注を設けた（ただし本文中の括弧書きは本文中の注）。また図 6 以外の写真は原著にはないものを追加して掲載した。

Crane 博士主要著作

Crane, E. (ed.) 1975. Honey: a comprehensive survey. Heinemann, London. 608 pp.

Crane, E. 1983. The archaeology of beekeeping. Duckworth, London. 360 pp.

Crane, E. 1990. Bees and Beekeeping: science, practice and world resources. Heinemann Newnes, Oxford. 614 pp.

Crane, E. 1999. The world history of beekeeping and honey hunting. Duckworth, London. 682 pp.

Crane, E. 2001. The rock art of honey hunting. IBRA, Cardiff. 106 pp.